

< 解 説 >

子どもたちが体験活動ボランティア活動を行うことの意義を考えると自らその大切なポイントが浮かび上がる。コーディネーションの目的そのものであるが、すなわち、

- 1 子どもたちが自主的・自発的・主体的活動を展開しているかどうか。子どもたちがその事業の趣旨を理解し自ら企画・運営に関わっているか、子どもたち同士の親しい関係が形成されているか、子どもたちの振り返りは生かされているか。子どもたちの次への展望（子どもたちからの地域への貢献など）が描かれようとしているか。
- 2 それを手助けする大人たち（学校・教員・地域のボランティア・地域の各団体など）がその目的ミッションを共有しているかどうか。
- 3 特に学校との連携、学校側の連携態勢が整っているか。管理職の理解、地域の窓口になる担当が校務分掌で明確に位置付けられているか。
- 4 地域の方たちが対等の立場で話し合いをして進める組織作りができていないか。彼らの親しい関係が形成されているか。次への展望が描かれようとしているか。この活動に達成感を得ているか。

これらの観点から事例を考察してみると、まず1では、広島県廿日市市大野子ども体験活動・ボランティア活動支援センターにおいて、「ビッグ・フィールド大野隊」で活動してきた中学生が「この活動そのものが答えではないか」と考え、小学生の講師になることを決断し、それを支援センター・コーディネーターが支援した点が注目される。中学生が今までの自分たちの活動に大きな自信を持っていることが背景にあるが、パワーポイントを小学生用に再編集する中で、自発性・互いの協力性・小学生への配慮のある創意工夫の課題解決力が身につく。また、これを成し遂げたことは自分たちに対する自信、自己肯定感を得る。まさに「生きる力」である。大人は「見守り隊」として周りから背後から支えていく。大人と子どもの関係性でいえば理想的な形態である。山形県地域貢献活動情報センター「YYボランティア」は高校生の持っている力を存分に発揮させている。公民館を主な活動拠点として学校枠を越えた高校生の地域活動であり、各地域の高校生サークルが一般生徒の夏休みのボランティア体験活動を受け入れ、体験先を斡旋する。センターは県内の全中高校への広報、教育委員会・地域の支援者とのコーディネートなどを行って支えている。しかし、この二つの事例には課題も見えている。大野町が成功したのは、幸いに中学生に代休があったためであり、山形では希望生徒のニーズに対して高校生サークルの受け入れが間に合わない、という点である。ここで2、3、4の関係する大人の連携・その組織の必要性が出てくる。兵庫県たつの市「たつの市子どもの居場所づくり推進協議会」においては、地域側に「推進協議会」、「運営・実行委員会」（この二つの役割も明確である）があり、学校側でも「校長会」が対応し「子どもの居場所づくり窓口（担当）」も各学校においている。教育委員会が「地域」「学校」「家庭」をつなげコーディネートしている。事業の展開においては様々な予測外のことが起こる。この時に子どもたちをしっかりと支えるのは大人のミッションの共有と連携である。また、子どもたちの振り返り、活動報告と発表ではこの活動を経た次への意欲が出ている。自ら地域の主体として貢献しようとする言葉である。これを生かし「市民性・シティズンシップ」へつなげることが必要である。しかし、学校側、教員の受けとめ方はどうなのか。子どもたちの振り返りに学校は関わっているのか、明確ではなかった。

（橋本 洋光）